

地域とともに



防災研究者が語るハザードポイント
今、金沢の“ココ”が危ない

これ抜きに「大学の社会貢献活動」は語れない！
金大生の広がるチカラ

2004 年度の活動報告
角間の里山自然学校この一年

知る・味わう・体験する
「金沢学」講座

21 世紀 COE プログラム
「発達・学習・記憶と
障害の革新的脳科学の創成」

地域へ発信される学びの場
生涯学習・人材養成

目に見えてきた成果
産学官連携の現在

大学にできる
「社会貢献」
その新たな一歩
イタリヤ
サンタ・クロッチェ教会
壁画修復調査プロジェクト



手をつなげば、
きつとつまぐらぐ。

大学の「知」と地域の「活力」
連携から広がる無限の可能性
皆さんと一緒に、この街を、そして住む人を元気にしていきたい

地域とともに
金沢大学社会貢献室



大学にできる「社会貢献」

イタリア・フィレンツェにある

サンタ・クロッチェ教会大礼拝堂の「聖十字架物語」。

何百年もの間、人々の祈りを遥か高みから見下ろしてきた

巨大な壁画の修復に、金沢大学が乗り出すことになった。

芸術分野における大学の国際貢献という

前人未踏のジャンルへの挑戦の背景には、

プロジェクトに関わる個と組織の大きな決断のストーリーがあった。

その新たな一歩

学生編集委員
縄野 朋子

宮下 孝晴 (みやした たかはる)

1949年東京都生まれ。

フィレンツェ大学教育学部(美術史)卒業。

ウーゴ・プロカッチ教授のもとでフレスコ画史を学び、アレクサンドロ・パッロンキ教授およびフランコ・カルディーニ教授に師事して「15世紀フィレンツェ絵画史における三王礼拝図」を研究する。

1973~84年まで、イタリア在住11年。現在は金沢大学教授(教育学部)。専攻はイタリアの中世・ルネサンス美術史で、13~15世紀のイタリアにおけるフレスコ(壁画)技法と図像学を研究。

主な著作

『イタリア美術鑑賞紀行』(全7巻 美術出版社)

『モナ・リザが微笑む—レオナルド・ダ・ヴィンチの生涯』(講談社)

『ルネサンスの画家ポントルモの日記』(共著 白水社)

『フィレンツェ美術散歩』(新潮社)

『CD-ROM 千の都の物語 フィレンツェ』(キャラバン・インタラクティブ)



一本の電話から始まった 世界への大きな一歩

きっかけは一本の電話だった。「病んでいる壁画を救ってほしい」
宮下孝晴教授のもとに2億円の寄付の申し出があったのは、1999年末のことだ。

そのしばらく前、宮下教授はNHK教育テレビ「人間講座」で、ルネッサンス黎明期のフレスコ壁画をテーマに講師を務めた。それを見たある美術愛好家が、イタリアの壁画修復のために役立ててほしいと申し出たのだ。

2億円。宮下教授自身、そんな大きな金額を寄付されるなどということは、まったくの予想外であった。「最初はイタズラ電話かと思いましたよ」。しかし、数ある視聴者からの電話にまぎれたこの電話こそが、すべての始まりとなったのである。

半信半疑のままに話を聞いていた教授も、次第にこの申し出が本心からのものであるということに気づき始めた。実際に会って話をし、氏の気持ちの本物であることを確信した教授は、託されたこのお金を確実に有効に使うと心に決めた。

しかし、そこには困難も生じてくる。文化遺産を守って欲しいという純粋な気持ちに対し、たった一人の力で応えることができるだろうか。寄付されたお金で財団を設立するとか、企業に委託す

る、ということも考えられるだろう。けれどもルーズなイタリアでは、ユネスコからの寄付金といえども、本来の目的に使われないまま消えてしまうことも、決して珍しくはない。そうなってしまっただけは、せっかくの氏の厚意が報われない。

様々な可能性を考えた結果、宮下教授は大学に相談することに決めた。「金沢大学の人間である僕が託されたことなのだから、金沢大学という組織全体で責任を持ってお金の行方を見届けることが望ましいと思っただけです」。そして、学長はじめ、様々な方面との話し合いが始まった。

そこで分かった事実。それは、芸術分野における大学の貢献活動というのは、まったくの未開拓分野であるということだった。これまで、大学が行う社会貢献事業という、自然科学系の分野のことがほとんどであった。大学が企業と提携し、大規模なプロジェクトを行うというのは、すでによく聞く話である。しかし今回のように、人文系の芸術分野において、大学が協力して援助活動を行うというのは、どの大学においてもまったく前例がないことであった。

前例がないことへ挑戦するのは、多かれ少なかれ必ず危険が伴う。しかし誰かが「第一歩」を踏み出さなければ、どんなことも進展はしないだろう。大学側はその「第一歩」を踏み出すことを決断

した。文部科学省や文化庁に対する説明、大学としての寄付金の管理の仕方、修復作業の現場となるイタリアとの話し合い。問題は山積みだったが、一つ一つの問題を慎重にクリアしていき、教授・大学・イタリアの三者が協力しあう壁画の修復事業が始動した。

一人の「後世に文化遺産を伝えたい」という思いは、大学を通すことによって実現可能なプロジェクトにできるということが、この事業を進めていく上での大きな意義のひとつになっていると言えるだろう。

海を渡って届けられた 個の想い、大学の決断

実際にどの壁画を修復するかについて、教授はかなり時間をかけて決定を下したと言う。研究者としての立場からは、せっかくこのように寄付という形で修復をするのなら、誰もがまず考えるような芸術的価値の高いものを選ぶよりも、歴史的価値の高いもの、まだフレスコ画の技術が確立される以前の、洞窟に描かれた壁画など一歩を修復するのが良いのではないかと思ったりもしたそうである。しかし、個人的な寄付に対して誠

実に対応するには、自分の学術知識をきちんと生かせる場所、自分が最も信頼できる人たちに実際の修復作業をまかせることが一番大切であるだろうと考えた。その結果、教授自身が二十代、三十代と



① サンタ・クローチェ教会
 ② サンタ・クローチェ教会後陣の大礼拝堂
 ③ 大学・教会・修復研究所の三者による調印式
 ④ 大礼拝堂の壁画（1380年頃、アーネヨロ・ガッディ作）

学んだ場所でもあるフィレンツェの国立修復研究所と協力することになった。そして、教授があげたリストの中から、過去50年間に修復されていないものとして、サンタ・クローチェ教会の壁画「聖十字架物語」を選ぶことになった。こうして、宮下教授は寄付に對する第一の責任を果たすことができた。大学という組織と専門知識を持った教授とが協力し、一体となることが、イタリアと日本という国境を越えて国際協定を結び、寄付に對する誠実な対応、そして文化事業に貢献することを可能にしたと言える。

世界の評価にさらされる修復の倫理と哲学

教授はさらに、これから果たすべき第二の責任があると語った。ここまでは、寄付をしてくれた方に対する責任を一番に考えてきたが、実際に作業に入ろうという時期に來ている今、考えなくてはならないことがあると言う。

「文化財の保存・修復とは何か」ということ。ともすると我々は、新品そのものの状態をずっと保ち続けることや、完成直後の状態にまで限りなく近づけることが保存・修復の意味だと考えてしまう。事実、フィレンツェの国立修復研究所においても、過去には壁画の保存のために、壁から絵の部分をはがして博物館で保管するということも行われていたという。しか

し「絵」の部分だけが保存されることに、果たして芸術品としての意味はあるのだろうか。現在では、「壁画」という形であることにこそ意味があるのだという考えのもと、そのような保存方法は取らなくなっている。修理・修復作業についても同様である。現代のテクノロジーを用いれば、科学的分析と計算によって絵が描かれた当時の状態を完全に再現することも可能であるという。しかし「歴史的な文化遺産」の修復を考えると、この点が難しい問題になってくる。時間の経過とともに蓄積された汚れを100パーセント取り去ることが正しいことでは決していない。「医療の問題とよく似ていると思います」と宮下教授は言う。どこまでが自然な治療で、どこからが過剰な治療になるのか。ここからは倫理観の問題となってくる。教授は、歴史に逆らって「できたての絵」を再現することが今回の目的ではないという。どのくらいの古さを残し、時間を感じてもらおうかという点が、今後の課題となってくる。「このプロジェクトを通じて、人々の歴史的な文化財の保存・修復に對する意識を高め、広めることができたらと思います」

文化遺産を適切な形にして後世に伝えること。これは、工芸王国・石川でも避けて通れない課題だろうと宮下教授は言う。人々にこの問題について考えてもらうこと。それが第二の責任であると同時に、大学として地域、そして世

界に對してできる新たな貢献活動になるだろう。長くて5年はかかるというこの事業が終わり、壁画が公開されるとき、金沢大学に頼んでよかった、そんな声が聞けることを期待したい。

解説

フレスコ画法とは

壁に塗った漆喰が塗れているうちに、水で溶いた顔料で絵を描く技法。漆喰が乾くと、顔料は漆喰の結晶の中に閉じこめられるため、壁画は強い耐久性を持つ。漆喰が乾くまでの8時間ほどの間に描ききらなければならぬので、画面全体をジグソーパズルのように細かく分割して、一日一日漆喰を塗りつきながら仕事を進めていく方法が取られた。また、アルカリ性の漆喰に描くため、使用できる顔料の種類が制限されるなど、様々な技法的困難を解決しなければならなかった。

画家は塗れた漆喰の壁に直接描くため、乾いた後の発色を体験から熟知していなければならぬ。また書き直しが許されないので、確実な描写力を要求された。



① サンタ・クローチェ教会後陣の大礼拝堂のステンドグラス
② キリストの架けられた聖十字架(サンタ・クローチェ)

A b o u t S a n t a C r o c e

解説

サンタ・クローチェ教会

フィレンツェの三大教会の一つ。フランチェスコ修道会のフィレンツェにおける本部でもあり、歴史的・文化的に大きな役割を果たしてきた。室内には多くの著名人たち（ギベルティ親子、ミケランジェロ、ガリレオ）が埋葬されており、一般に「フィレンツェのパンテオン」と呼ばれている。その建設は、フィレンツェ大聖堂と同じアルノルフォ・ディ・カンピオの設計により、1294年に着工された。清貧をモットーとした聖フランチェスコの精神を反映して天井は簡素な木骨組みである。

「聖十字架物語」

キリストの架けられた聖十字架（サンタ・クローチェ）の木の由来に関する物語で、旧約聖書のエデンの園から始まり、7世紀の東ローマ皇帝ヘラクリウスの時代に及ぶ壮大な歴史的長編物語。この物語は13世紀にジェノヴァの大司教であったヤコブス・デ・ウォラギネによって集大成された『黄金伝説』に収められている。（宮下孝晴著『フレスコ画のルネサンス』p.110）壁画連作の代表的なものとして、14世紀にアーニョロ・ガッディがフィレンツェのサンタ・クローチェ教会に描いたものや、15世紀にピエロ・デッラ・フランチェスカがアレツォのサン・フランチェスコ教会に描いたものが有名である。

アーニョロ・ガッディ

Agnolo Gaddi
（フィレンツェの画家 1333?-1396）

ジョットの弟子として24年間も仕事をしたタッデーオ・ガッディの息子で、フィレンツェのサンタ・クローチェ教会後陣に描かれた「聖十字架物語」の壁画連作(1380頃)は彼の代表作である。また、このあとプラート大聖堂内のチントラ礼拝堂にも壁画連作(1392-95年)を描いている。ジョットの革新的な絵画表現を受け継ぎながらも、画面の装飾性や幻想性を強めて独特の物語的展開を工夫した。

このプロジェクトの立上げにおいては、関係省庁から多大な指導・助言をいただきました。プロジェクトのスタートに際して、文化庁担当官よりコメントをいただきました。

金沢大学の主導による「イタリア共和国サンタ・クローチェ教会壁画修復・調査研究」プロジェクトの開始をお喜び申し上げます。

サンタ・クローチェ教会はフィレンツェの観光名所であるとともに、その壁画は美術遺産の観点から、また、美術史的観点の双方から世界的な価値を有するものです。このプロジェクトは、金沢大学ならではの人材と組織力を活かして、世界的に貴重な文化遺産を対象に国際貢献を行うとともに、その成果を写真展やシンポジウムを通じて地域に還元する先駆的な試みとなることでしょう。

5年間の長期にわたるプロジェクトです。関係者の方々のご健勝とプロジェクトの成功を心より祈念いたします。

文化庁国際課
国際文化交流調整官

中島健次



国際貢献

3

大学にできる「社会貢献」 その新たな一歩

イタリア サンタ・クローチェ教会
壁画修復調査プロジェクト

特集1

8

防災研究者が語るハザードポイント

今、金沢の“ココ”が危ない

特集2

12

これ抜きに「大学の社会貢献活動」は語れない！

金大生の広がるチカラ

複合領域

16

角間の里山自然学校この一年

2004年度の活動報告

文化

19

金沢はこんな街 知る・味わう・体験する講座「金沢学」

医療・保健・福祉

20

「発達・学習・記憶と障害の革新的脳科学の創成」

21世紀COEプログラム始動 世界水準の脳研究拠点に

生涯学習

22

地域へ発信される学びの場

金沢大学が提供する生涯学習講座

人材養成

24

現場とタッグで未来の教員を養成

新たにまなぶ「場」がここにはある

地域課題

26

社会貢献室の取り組み

産学官連携

27

目に見えてきた成果

産学官連携の現在

30

編集委員紹介



今、金沢の「ココ」が危ない

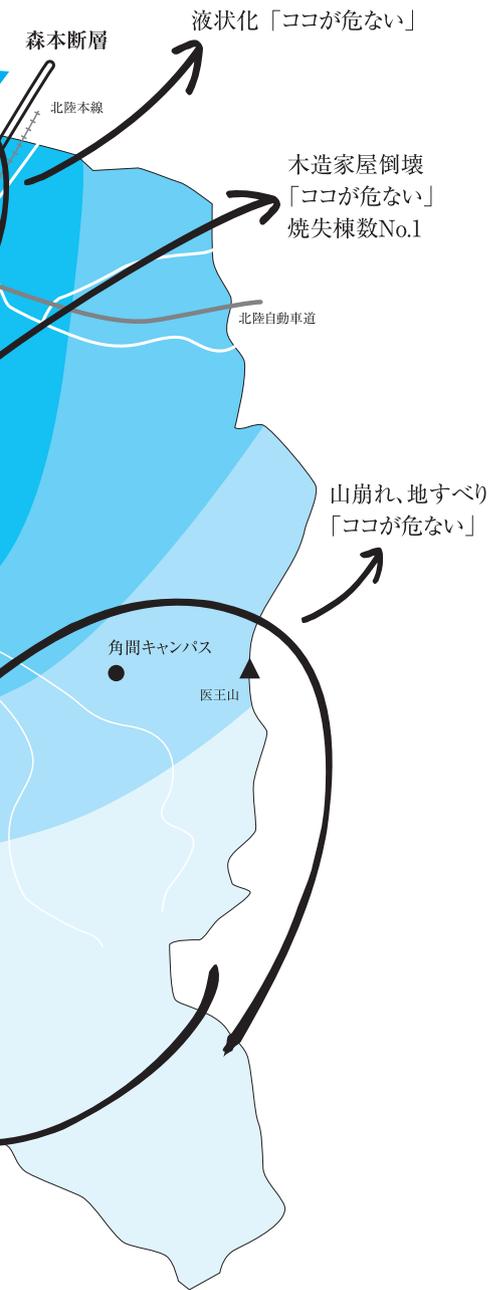
明日来るかもしれない地震

大丈夫だという自信

あなたはどっちのジジンをえらびますか

金沢崩壊!? マグニチュード7の地震。家屋倒壊、道路寸断、火災、地すべり、津波……。都市機能が麻痺する、そんな日を想像できるだろうか。足元に森本・富樫断層を抱える金沢。ひとたび揺れ動けば阪神・淡路大震災、新潟県中越地震並みの地震が襲う。その時あなたは自分の街、ここ金沢をどう守りますか？

MAP



ここ金沢は、ハザードマップから分かるように地震被害が深刻な地域と予想される。特に、積雪時に地震が重なるとその被害は計り知れない。

まずは、自分の目で住んでいる

地域を眺め、どんな状況になるか想像してみよう。

県内にはご存知のとおり、森本断層と富樫断層がある。これら断層はどこから破壊が始まるか予想はできない。また、これは現時

学生編集委員
中西 晋康、肴倉 玉実、塩本 祥之
東海 佳奈子、水木 裕子

災害は
忘れたころにやってくる

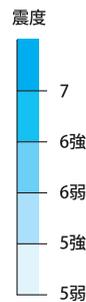
太平洋側に比べ、日本海側の都市は有感地震が極端に少ない。そのためか、防災意識は低いのが現状だ。しかし、度々大地震の被害を受けていることを忘れてはならない。

1799年6月26日の夕刻、激しい揺れが金沢の街を襲った。江戸時代を代表する大都市直下型地震「金沢地震」だ。マグニチュードは6.0が予想される。このときの地震は森本・富樫断層帯の活動によるものだ。金沢城内では石垣や堀が崩れ、辰巳用水は壊れ、浅野川沿いでは液状化が起こった。北の方の普正には液状化のあとが残っている。「政郷記」には、当時の被害状況が記されている。「帰路往還大樋町端より一町計之所に而地震に合い、倒れ候處暫起上り不得。田毎之水東西に五、七尺計程宛傾く内に、田水板の如く成て空に三、四尺計上り、並松五、六尺震れ候を見受候旨」。ここから激しい地震と液状化現象の発生、また現金沢市大樋町付近では田園が5〜7尺（1尺＝30センチメートル）東西に傾いた可能性があることが分かった。

金沢は地震が来ないところでは決していない。200年の時が経ったこと、地震のあとが道路工事によって見えなくなったことが地震に備える意識を低くさせている。しかし、近い将来、その森本・富

金沢市・危険度

森本・富樫断層が動いた時に予想される震度及び被害状況。
「ココが危ない」予想地域は特に被害が大きいぞ!



地盤から見直す 金沢の安全性

金沢は有感地震が少ないと言われている。しかし、それがすなわち安全な地域であるということではない。

事実、金沢大学の北浦教授によれば、山間部と沿岸部の間の地域では、地盤が比較的軟らかい場所が多いという。その一帯は沖積地盤という約1万年前にできた新しい地盤からなっており、地震が起これば液状化の可能性が高く、建物も壊れやすい。

地震のもたらす被害は、何も揺れによる直接的なものだけではなく、火災や津波、そして強い揺れによって引き起こされる液状化現象も、被害を拡大させる大きな要因となっているのである。

液状化現象とは、地震で大きく揺すられた地盤が圧力の強い水に押し上げられて支持力を失い、液体のようになって噴出したり、地面が沈下したりする現象のことである。

樫断層が動くのではないかと考えられている。

西暦(年)	地震の名称	M(震度)
一五八六	天正地震	7・8
一七九九	金沢地震	6・0
一八五八	飛越地震	7・0
一九四八	福井地震	7・1
一九五二	大聖寺沖地震	6・5
一九六一	北美濃地震	7・0
一九九三	能登半島沖地震	6・6

ある。液状化が起これば、上に建てられていた建物が沈んで倒壊してしまうなどの重大な被害に繋がります。液状化は、地下水位が高く、地下20メートル程度までに緩い状態の砂地盤が分布する箇所が発生するとされている。

反対に、一番地盤が硬いのは寺町や小立野の地盤だ。ここは洪積地盤という、約10万年前にできた地盤からなっており、この地域では被害も比較的少ないものと考えられる。しかし、そこよりも海に近い地域は地盤が軟らかいため被害が大きくなる可能性があり、また、沖積地盤では地震の波が増幅する恐れもある。つまり、ここ金沢にあっても、しっかりとした液状化対策や地震対策が必要不可欠なのである。



まずは山間部。
山崩れ、崖付近の急傾斜地や地すべり地の大部分、造成地は盛土の厚さの高い丘陵地で危険性が高くなっている。



続いて、河川・港湾部。
震度と液状化によって、市内下流部と北西部に多く分布する重要水防箇所(堤防等)36ヶ所すべてで危険性が高い。港湾では金沢港



の岸壁の大部分で被害が大きくなると予想される。
また津波の被害も考えなければならない。

続いて、都市部。

地震被害としては、家屋の倒壊による圧死。道が狭いことによる救助も困難となるだろう。
また、火災による二次被害も想定される。出火原因は、ストーブ、コンロなどの一般火気器具、化学薬品取扱所、危険物施設など様々である。

やはり被害が大きいのは、建築物密集地、老朽化などによる中心市街地となる。
次にライフラインはどうだろうか。



気象庁の震度階級によると震度7では、ガス・電気・上下水道の停止が予想される。

では、交通施設はどうだろうか。
道路は75ヶ所(0・25ヶ所/km)、鉄道は43ヶ所(1・50ヶ所/km)で被害が予想される。

また、橋りょうは96橋のうち22橋が落橋の危険性が高くなっている。
その原因としては地震動が高く、液状化の危険性が高いことなどが考えられる。

以上から分かるように、地域ごとによって被害には差が出る。各地域ごとにおおよその被害を認識し、そのための対策を講じることが必要となってくる。

防災研究者から見た、ここ金沢

防災研究者には今の金沢はどのように映るのか。金沢市民に欠けているものは何か。地震に備えるための安全なまちづくりには今何が必要なのか。県内での勉強会や各フォーラムで精力的に活動する、金沢大学自然科学研究科（工学部）教授の北浦勝氏に率直に聞いてみた。

意識の低さと油断は、禁物

金沢はとても住みやすく、これといった自然災害もなく、近年顕著になってきた地震や津波、また大雨による洪水被害の影響もほとんど受けていません。過去の日本海中部地震や能登半島沖地震においても受けていません。

ところが、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震、スマトラ島沖巨大地震、それによる津波などの災害で共通して言えることがあります。それは、これら自然災害が起きた地域では大災害が最近は発生しておらず、「まさかうちにはこ

ないだろう」と地域住民が考えていたことです。そのような地域では、災害に備えるといった住民の意識は低く、災害に対して油断があったと思います。そのため災害

が起きたとき、この意識の低さや油断が甚大な被害を引き起こしてまったのです。つまり、金沢市民も意識の低さや油断の程度において、先程の地域と同じであるという事です。そしてこの意識の低さや油断が金沢の本質的な問題であるのです。当然のことかもしれませんが、災害に備え、市民一人ひとりが意識を持って対策にあたる事が、一番重要なことである

と思います。

山間部、中間部、沿岸部の改善点

地震対策は金沢の地形から、山間部、中間部、沿岸部といった地域ごとに異なってきます。さらには、雪という問題も密接に関係してきます。

金沢は観光客が多い都市ですので、観光を守りながらの地震対策も必要となります。

具体的には、広めの道路の建設や、消火施設、耐震水槽、避難所になるであろう小、中学校の耐震補強も必要となります。地震被害も、山間部、沿岸部、海と山の中間部、それぞれで異なる予想されます。地震の緊急性、切迫性が福祉や介護に比べて見えにくいですが、苦しい台所をやりくりして予算をつけているようです。

山間部は別ルートでの道路確保

山間部では、一本道の道路が多いですね。金沢大学も角間にありますが、大学まで行くには一本道しかありません。地震で道路が寸断されたら、大学は孤立してしまい、いわば陸の孤島になる危険性があります。また、新潟県中越地震で見られたように物資の供給が困難になると考えられます。それ

造るか、もしくはループ状にして、一部が寸断されても別ルートで通れるようにする工夫が必要となります。

沿岸部は津波対策

沿岸部では、津波の懸念があります。日本海中部地震では、輪島、船倉（へぐら）島で津波被害がありました。また、昭和39年新潟地震でも小さいながらも七尾、能登にも津波はありえますし、能登半島や小松沖などで地震が起これば金沢にも来る可能性はあります。

金石あたりでは同報防災無線の屋外拡声子局が数多く設置されています。ですので、津波がきたら皆さんに聞こえるようになっていきます。それから、割と背の高い建物がありますので、万一の場合には、あがつてくださーいという協定があれば申し分ありません。

ただし、一つではなくて、数百メートルおきに協定することが必要です。

中間部での地盤対策には大別して2種類の対策があります。

一つ目は、かつ根本的には軟弱

地盤の改良をすることです。①軟らかい地盤にセメントなどを混ぜて硬くする、②軟らかい土を砂利と置き換える、③土中の水分を除去などの方法があります。確実に効果が期待できますが、どの範囲（面積と深さ）までをするかで効果と工事費（高い）が異なりますので、公共構造物などに施さされる場合があります。

二つ目は構造物側で対策をする方法です。大きな構造物では杭を固い地盤に届くまで打ち込んでいきます。軟らかい層に建っている県庁などでは杭という見えないところで大きな工事費を使っています。これで建物の沈下を防いだり、地震に抵抗しています。普通の家の場合には杭を打つには金がかかりすぎますが、1メートルくらいの松杭を打つだけでも小さくない効



北浦 勝（きたうら まさる）

金沢大学教授工学博士
1944年生まれ
67年 京都大学工学部土木工学科卒業、
同大学院、助手を経て、
77年4月、金沢大学工学部助教授
85年より、金沢大学大学院
自然科学研究科教授（工学部）
専門分野 地震防災工学、雪工学

これだけは準備しよう
防災グッズ

(衣)	<input type="checkbox"/> 防寒具 <input type="checkbox"/> タオル <input type="checkbox"/> 軍手 <input type="checkbox"/> 雨具	
(食)	<input type="checkbox"/> 水 <input type="checkbox"/> 保存食 乾パン、 缶詰、 インスタント食品、 レトルト食品 etc.	
(住)	<input type="checkbox"/> 懐中電灯 <input type="checkbox"/> ラジオ <input type="checkbox"/> 救急箱 <input type="checkbox"/> ガスなどの燃料 <input type="checkbox"/> 乾電池	

準備したものは、□にチェックしよう！

果があると言われています。地震時に大きく傾くことを避けられると思われます。

全体的な対策

市など自治体レベルでは、耐震

構造住居にするための補助や災害に備えるPRをもっと徹底する必要がある。金沢では、木造家屋の耐震診断、耐震補強の費用に対して一部補助が受けられますので、積極的にそれらを活用するべきでしょう。

個人レベルでは、家の住み方をそれぞれが考えていく必要があります。例えば、不安定な家具はなにか。倒れてくる家具の下敷きにならないかなど基本的なことはたくさんあります。

ちょこっとトーク
by 編集委員

**「怖いね」で
終わっちゃダメ**



普段学生同士で地震について話す？

怖いね・・・とは話すけど、そこから発展しないな。

SI 大学で研究していることすら知らなかったよ。

T 今回この企画に携わるまで先生のこと全然知らなかった。

SA じゃあ今までいろいろ調べてきたけど実際に地震が起きたらどうする？

T ハザードマップを調べていて、住んでいる場所が古い住宅が多くて倒壊率が高く火災も心配だな。

M 金沢は空襲を受けていないから、道が細くて消防車が入っていけない所もあるね。

N そうそう。狭すぎるよ。俺もこの間車擦ったよ。それに、道わかりにくいんだよね。

SI 避難経路の指示があったらね。

SA 避難場所どこか知ってる？

M T 寮で避難訓練はしてるけど・・・。

N 俺は物を頭より高いところに置いてないよ。

SA へえー。そうなんだ。ところで、今の金沢は地震に強い街かな？

T 昔からある家って雪対策に家の柱がふとく、頑丈になってんだよね。

N 俺は、地震に強いと思ってる街かなと思うよ。

SI じゃあ地震に強い街ってなんだろう？

M 地質を調べてわかったんだけど、金沢は液状化が起こりやすいらしいよ。

M 行政などの補助を得て、基礎工事はしっかりしたいね。

T 防災対策室が災害時にだけできるのって、何か変だよな。

N 30年間に5%の確率だから、地震が起こることを前提にして防災グッズや建物の補強をしたいよね。

M それに北浦先生がおっしゃってたけど、大学生と地域のかかわりって重要だよな。阪神・淡路大震災の時には大学生の犠牲者も多かったけれど、一方で救助活動や避難所での活躍もあったという話を聞いたよ。

SI 今は隣の家の人の顔知らないけど、地震が起これたら協力しないとね。

SA つまり行政だけでなく、個人の防災対策がしっかりなされていることと、人とのつながりが大事なことかな。

N そうそう北浦教授もおっしゃってたよ。自助、共助、公助が重要だって。

積雪時に地震がきたら被害は拡大

最後に雪との関連ですが、積雪時に地震が起きると被害が2割増えると言われています。というのも、屋根に雪が積もるとその重さは、1平方メートルで、約300キログラムです。それは、昔の小錦関と舞の海関が屋根に乗っていると考えてください。もちろん屋根の大きさは、1平方メートル以上ありますから、その分、小錦関と舞の海関が増えるんです。ここに、地震が来るとどうなるか。つまり地震は、足払いみたいなものなのです、簡単に家が倒れます。そのため積雪が多い地域では、柱

が太いもの、4寸角(12センチ)以上を使用しています。しかし雪のない地方ではもっと細いです。また積雪によって、救助作業は難航することが予想されます。金沢は道路の狭い所が多いですから、積雪があると車は通りにくいんです。そうすると、救助も遅れます。こういう理由から、被害が2割増すと思われます。ですから、普段からの心がけがいざというとき役に立つのです。もちろん地震が起これば、まず自分を守る自助が必ずですが、その次には近所の人を助ける共助、そして市や国、県の助けがくる公助という順に考えて行動して欲しいと思います。

防災七カ条

- 一、防災グッズを整えておこう
- 二、避難場所までの道を確認しよう
- 三、家具の転倒防止策を考えよう
- 四、耐震診断を受けてみよう
- 五、近所の人に自分をアピールしておこう
- 六、隣に居る人と地震について三分話してみよう
- 七、金沢大学にきて地震の研究を見てみよう

これ抜きに

「大学の社会貢献活動」は語れない!

金大生の

学生編集委員
縄野 朋子、神谷 卓史、安井 裕奈
下里 真悠子、舘 謙太郎



「街から学生が消えた」「市民と学生の交流が無い」「学生は何をしているのだろう」大学が角間に移転してからよく耳にするこれらの言葉たち。しかし、果たしてそれは本当なのだろうか? 意外なところに存在する学生たちの活動。今回は、サークルを通して地域と関わる金大生の姿に迫る。

広がるチカラ

KURE

常に進歩を求めること
それがキュアの「吸引力」

「学生の持つエネルギー」。金沢大学の学生によるボランティアサークル「KURE(キュア)」の活動にはそれがあふれている。医学部生が中心となって活動するキュアは、2年前の秋、初代代表を含む6人の有志によって作られた。医者になって人々の役に立ちたい、患者さんの苦しみを少しでもやわらげたいなど、積極的に医療に携わろうと考えて入学してくる学生たち。けれども初めのうちは、他学部生と同じように教養科目の単位習得が主で、実際に患者さんたちと触れ合う機会はほぼゼロ。そんな現実と、医学部生たちの「何かしたい」「人の役に立ちたい」というやる気とのギャップが、キュアの誕生につながった。

世界の医療情勢について学習・体験する部門、国連NGOのIFM SA(国際医学生連盟)への加盟を通じて活動する部門、異文化理解に重点を置いた活動を行う部門、病院内の環境作りを考える部門、そして、ボランティアなど地域社会に対して働きかける部門が、それぞれ別個に活動していたという。現在、代表者は3代目。コミッティ制度をやめ、これらの活動を全体で考えるプロジェクト制へと構造を変えたが、当初からの活動理念に変わりはない。

「学生だから」できること

「この団体は、国際医療や地域医療などに興味を持った学生によって構成され、メンバーが各々、

「地球」の他に「地面」の意味もあり、「世界に届く」という国際的な意味に加え、「ここ金沢で」という地域的な意味がかけられている。立ち上げ当初は5つのコミッティ(委員会)に分かれていた。



モチベーションの高いメンバーが多いキュアは、話し合いも活発



病院が「コンサート会場」に。入院中の患者さんの表情も明るく

「ぬいぐるみ病院」はIFMSAの公式プロジェクトにも採用された



学生生活においてまたその後の将来において、していきたいことを見つけ、それに向かって活動を行う場である。また、活動を通じて、学生として我々が地域社会に還元できるものを探り、それを実現する」。この理念と目標を基本とし、キュアは実に様々な活動を展開している。

大学病院では、小児科に入院中で学校に通えない子どもたちに家庭教師として勉強を教えてあげたり、院内コンサートのコーディネートとして金沢大学のフィルハーモニーサークルを招いたり、金沢美大の学生の作品展示会を企画したりした。一昨年の11月に香林坊ハーバーで開かれた「キュアフェスティバル」では、地域の人たちを対象に、老若男女問わず医療に親しんでもらうため、学生の視点からの分かりやすい表現を工夫した。例えば「目で見る体のふしぎ」では、腸の長さを実感して

もらうためのロープ、肺の病気がしくみを知ってもらうためのペットボトルと風船の模型などを展示。また、子どもの頃から健康に対する意識を高めることが生活習慣病の予防につながるとして、「ぬいぐるみ病院」を開院。子どもたちに自分のぬいぐるみを連れてきてもらい、「風邪をひいた」「おなか痛い」「けがをした」などの症状に合わせて、診察や治療を行った。事後アンケートには、「子どもがきちんとぬいぐるみの世話を

するようになった」などの声も寄せられた。また、毎年夏には国際医療を実際に体験していくフィールドトリップがある。発展途上国との環境の違いは、実際に現地に行ってみなくてはわからないこともあるため、将来海外で活動することを考えたとき、どんな知識や技術が求められるかを知ることが大切になってくる。これまでタイやインドに行き、たくさんの物乞いに遭遇したり、用を足しているすぐ横で洗濯をする人たちの目の当たりにしたりするといった経験から、考えさせられることも多かったという。このほかにも、ラジオ英会話を聞いたりネイティブの先生と英会話の練習をしたりして、国際的な活動をするための基礎をつくる常設プロジェクトもあるそうだ。

活動は止まらない

キュアの持つエネルギーは、他

環境の違いを肌で感じるフィールドトリップ



大学にも影響を与えた。キュアフェスティバルで行った「ぬいぐるみ病院」の報告をきっかけに、新たに子どもたちに対する働きかけが活発化した事例もあるという。また、「Think yours eelf」は、キュアの元メンバーが独立して作った、性感染症についての正しい知識を発信するサークルである。

現代表の池田さんは、キュアを語るうえで欠かせないのは「吸引力」だと言う。彼女自身、手話サークルと一緒に者との交流会をするという企画に魅かれて、キュアに入った。活動理念にもあるように、ここでは学生自らがやりたいうことを考え、自分たちの力で実現させている。そこにあふれるエネルギーこそが、人をひきつける

魅力になっていくのだ。「新しいものを生み出そう」とないことほど魅力がないことはない、と語ります。その言葉どおり、秋に再びキュアフェスティバルを開催する際は、前回の「ぬいぐるみ病院」をもう一歩発展させたかたちでやっていきたいと企画。大学病院では、小児科向けの新聞を作り始めたり、院内コンサートで自ら演奏する側としてやろうと交差している。

やろうと思ったことを次々に実現していくこと。それは社会と関わり合うという意欲に満ちた学生だからこそできることではないか。数年後、いったい彼らはどんな魅力あふれる社会人になっているだろうか。

子ども会サークル

つみき



「子どもと触れ合うのが好きだから、やっているんです」。部やサークルの活動は、他人から評価されて初めてやりがいを感じる、そう思っていたところに、代表者の三輪さんの言葉は新鮮に響いた。金沢大学子ども会サークル「つみき」は部員40人ほど。週3回の活動をしている。月、木は子ども達との触れ合いに関する反省会、休日にどんな行事を組むのかを話しあっている。土曜日は小立野と入江の公園に部員の人数を分けて出向き、子ども達と触れ合っている。

「子ども達の安全には特に気を配っています」。公園での遊びは鬼ごっこ、縄跳び、サッカーなど様々だ。公園の外に飛び出さないように、怪我を負わないように注意している。

活動は、親から親、子どもから子どもへと口コミで広がっている。毎週必ず遊びに来る子どももいて、名前を覚えて子どもと同じ目線で親しく関わっている。そういった事が人と人との繋がり強めているのだらう。現実には親からも感謝の声があるという。過去にサークルに遊んでもらった小学生が金沢大学に入



代表者の三輪さん

学し、そのままサークルに入ってくるケースもあるという。記憶のどこかにいい思い出として残っていたのではないだろうか。サークルの伝統や誇りは、先輩から後輩へと伝承されていき、社会にでてからも十分に役立つだろう。「人から評価されるためにやっている、という態度ではなく、ただ子どもが好きだから、子どもと対等に接している」。部員にとってそれは当然の事だし、ボランティア活動という意識もない。相手から来るのを待つのではなく、自分達から進んで直接地域の中へ溶け込むという姿勢を大切にしている。

他人のためのボランティアというより自分たちの好きな事だから

このサークルでは週に1回ろう者を招いて、彼らとの交流を通して手話を学んでいる。交流の内容は手話での会話にとどまらず、学生の企画したゲームや劇、クイズなど、多岐に渡っている。「手話を学ぶことより、ろう者の方とのふれあいそのものが大事なこと」。単にテキスト等から手話を学ぶだけでなく実際にろう者と関わりあう事で、彼らの文化や生活をも学んでいる。それによって、より彼らの実情に迫った手話を身に付けられるのだ。

「教育実習の際に躊躇せず堂々と振舞うことができた」という声もあるように、皆ここでの経験を自分の糧として生かしている。学生のうち手話を学びたいと考えても、なかなかその場を見つめることは難しい。そういった場をサークルという形で提供されているのは学生にとってもありがたい事だ。「私達はろう者の方々に教えてもらえばかりで、まだ何も役に立てていない」。そうサークル員は語った。しかし、ここで学んだ事はきつと将来、何らかの形で社会に還元されていくのだろう。



サークル員の金澤さん(左)と後藤さん(右)

手話を学ぶことより、ろう者の方とのふれあいそのものが大事

手話サークル

キラキラスマイル



児童文化部

児童文化部は50年以上続く歴史あるサークル。子ども向けの劇を県内の幼稚園生や小学生に届けている。「子どもたちの健やかな成長を願い、児童文化活動の一環としてよりよい文化財の研究・創造・発表を行う」サークル発足期から存在するこのスローガンを元に、毎年活動方針を話し合っている。

主な活動は夏と冬の公演。舞台劇を行うグループと人形劇を行うグループに分かれ、小学校や公民館を回る。劇は脚本から演出、人形まで全て自分たちの手作りで、脚本は部員全員の作品の中から投票で選ばれる。それぞれ子どもたちに伝えたいメッセージがこめられており、「見た目で人を判断してはいけない」などのテーマを持つている。

児童文化部の活動は口コミで県内に広がっており、依頼公演も年に4、5件行っている。子どもたちからの評判は良く、学校の先生からも好評。子どもの親から感謝のメールが送られてきたこともある。輪島に公演に行ったときなどは、

子ども達に伝えたいことを手作りの劇で

大学生くらいの若者が珍しいため、子どもたちに大人気だったという。

劇の制作には大変な労力がかかる。「夕方の6時から練習をして、夜明けまで人形を作っているときもありました」と元代表者の草場さんは語る。しかしそのぶん子どもたちの喜ぶ顔を見ると嬉しく、やり終わった後の満足感もひとしおだという。苦業を共にする部員の結束は強く、サークルにはなごやかな雰囲気がある。「あまり地域貢献をしているというつもりはないんですけどね」と部員たちは笑っていたが、その活動は、ただ口に出すだけでは伝わりにくい大切なメッセージを、分かりやすく楽しめる劇を通して地域の子どもたちに伝えている。

児童文化部は昨年11月に、大学からの推薦を受け、石川県健民運動青少年ボランティア賞を受賞している。今後も県内各所でその活動が見られることだろう。

金沢大学法律相談所

今、日本はちょっとした法律ブームだ。日常生活でのめ事やトラブルに出くわした時、あるいは本当につまらない小さな事柄でも、「法律ではどうなっているの?」という人が多いようだ。

気軽な「法律」への入り口

や能登半島に向かい活動している。高齢、過疎化が進む田舎の町では、若い人たちが来るだけで活気がつく。地元の人にははにかむ表情を見せながらも、自分達のために来てくれた学生を温かく迎えてくれるという。

またサークル内では上下の関係を持つことで組織化、教育の充実化が図られているらしい。

この金沢大学法律相談所の近頃の悩みは、肝心の相談件数が年々減少傾向にあることだ。インターネットの利用も活発のようにだが、さらなるアイデアも検討している。

金沢大学法律相談所を通して一人でも多くの人が「生きた法律」を感じる事ができたら。地域に向く姿勢と伝統は着実に結果を生むだろう。

取材を終えて

今回、地域に貢献する学生というテーマで取材した5つの団体に、共通して感じとれたことがある。

「将来に役立つから」「社会に貢献したいから」という意識だけでなく、「自分が好きな事だからやっていい」「今の自分にプラスアルファしたい」という趣旨で活動している学生もいるということだ。それが結果として、少なからず地域の役に立っている。だとすれば、そんなに

嬉しいことはないだろう。本当の意味での地域貢献は、学生の身分では難しいかもしれない。それを実行するためには、考え方、技術、知識、行動力といった実力が伴わないと不可能だからだ。しかし、それらを身につけるために大学という「場」が存在しているのだし、学生の活躍のバックボーンもまた大学が担っている。

数年後、世界中に花開く「金大生の子カラ」。これ抜きに「大学の社会貢献活動」は語れないのである。

角間の里山自然学校の二年

里山には生命いのちが満ちている。それはまた四季を通して様々な顔を見せてくれる。そんな魅力あふれる場所に多くの人が惹きつけられ、集まってきた。2004年度も金沢大学の里山自然学校が住民と一体化して、活発な活動を繰り広げた。里山の楽しさ、あなたも味わってみませんか？

学生編集委員 肴倉 玉実

四季折々の里山に遊ぶ

角間の里山自然学校

金沢大学では金沢城址にあったキャンパスを角間地区へ総合移転させるのに伴い、そのインパクトを最小化するために新キャンパス（全面積195ha）の約3分の1（約74ha）を「里山ゾーン」に指定し、豊かな自然を残している。そのフィールドで教育、研究や青年の自然体験、地域住民の生涯

学習を行っているのが平成11年に発足した角間の里山自然学校（以下里山自然学校）である。平成13年度からは里山自然学校の支援者として「角間の里山メイト（以下メイト）」を組織して、メイトによる自主活動が活発に行われるようになってきた。2004年度に行われた里山自然学校の様々な活動もメイトの活躍抜きでは語れないものとなっている。



はる

風薫る5月の土曜日。昨年の1枚から13枚にも拡張された里山の棚田、北谷（キタタン）で田植えが行われた。

学内に里山を持つ京都女子大学（京都市）、龍谷大学（同）、九州大学（福岡市）との交流を開始し



右：クサギの花
下：「何がいるかな」
昆虫採集（7/10）

てから今年で3年目にあたり、学生を巻き込んだ形での交流が本格化した。この日は京都女子大学と龍谷大学の学生計20名余りも加わって、賑やかさを増した参加者たちが裸足になって田んぼに入り、高さ15、6センチに伸びた苗を丁寧に植えつけていった。

「思ったより泥が温かく、滑らかだった」「最初、裸足で田んぼに入るのが怖かったが、やってみると楽しかった。また入ってみた」「足の指の間に入る泥の感触がたまらない」という感想が参加者たちからは多く寄せられた。メイトの「水田を渡る風、水や泥の感触といったものを全て感じて欲しい」という想いは着実に伝わっているようだ。



なつ

6月にしては少し肌寒い雨上がりの夕方。金沢大学大学教育開放センター前の駐車場に、虫捕り網や懐中電灯を手にした人々が続々と集まってくる。6月12日に行われたホタル観察会である。ホタルに関する説明を一通り聞いた後、場所を移動して小川のほとりにやってきた。

夕闇が色濃くなっていく中「ホタルいたつ」と発見の第一声があがった。まだ光りもしていないホタルを見つけたのは小学生。「これはちょっと大きいからゲンジボタルだ」との解説に参加者は感心しきり。その後ちらほらと舞い始



皆、泥んこ。大学間交流の田植え（5/22）



上：畑の肥料、竹炭作り
左：ドングリトトロ@金大祭



めたホタルを手にとった1人の参加者は、「心なしか温かい気がする」とつぶやいていた。
「ホタルの幼虫ってどんなの?」
「どこからともなく質間が出る。水の中においてカワニナを餌にしているんだ。卵のときから光っているんだよ」と先程の小学生。思わず足元の小川をのぞき込む。黒々とした水の中に光る卵や幼虫を見つけることは出来なかったが、

今後は忘れずに水中もチェックするようになりそうだ。
小川のせせらぎを後にしながら「ホタル見たの何年ぶりだろう。次は卵が光っているのを見てみたいなあ」「ホタルの乱舞っていうのかなあ。ああいうところにいるみたい」「いやあ、ここでも条件さえ良ければ見られますよ。今日はちょっと寒かったのかな」と参加者同士で話はずむ。



ホタルの乱舞できる環境とは何なのか。思いをはせるよい機会になったのではなからうか。



あき

澄んだ空気の中、もずの高鳴きに秋の深まりを感じる。10月23日と24日に、竹林整備を兼ねて里山から切り出した竹で炭を焼いた。炭の持つパワーが見直されつつある現在、また竹で焼く炭ということもあって、参加者たちは興味津々であった。
9月に切り出され乾燥させた竹は、窯の大きさにあわせて切断され、どんな炭になるのだろうかという期待と共に、次々と窯に納められていく。火を入れるといよいよ炭焼きの始まりだ。窯の温度を上げるための火の管理は難しく、夜の帳にすっぽりと包まれるまで交代で火の番をした。
「近頃、炭だけじゃなくて木酢液もいって言われますよね。それがどんな過程で作り出されるのかを実際やってみて分かった」。



ふゆ

参加者の1人は語る。「体験しながら学べるということ。周りから学んでいくという雰囲気。それが大きな魅力ですね」。
やっとの思いで焼き上げた炭を前に「お風呂に入れてみようかな」「ご飯炊くときに使ってみよう」と楽しげだ。里山で得られたものが生活の中に根付いていく、そんな瞬間であった。
角間に向かう雪道が朝日にきらめき、凍りついた雪が足元でざくざく音を立てる。1月22日に行われた北谷のワラでの「縄ないとわら草履作り」には、寒さにもかかわらず30名ほどが参加した。
一握りほどのわらをしごき、ごみを取る。ある程度しごと、まとめて束ねる。そうして束ねたわらを、柔らかくなるまで木槌で叩く。寒さに耐えかねた参加者たちが競うように木槌を手に取り、わらを叩きだした。稲わらの香りが立ちのぼり、だんだんと体が温まってくる。それと同時に「よしよ、よいしょ」と掛け声が出てくる。
「どのくらい叩けばいいんですか」「まだ下のほうが固いわ」「昔の人って大変やったんやろうね」そんなやりとりが交わされる。回しながら叩くと、わらが自然とよじれてくる。こうなれば完成であ

右：里山冬景色
下：もちつき (12/11)



る。しなやかになったわらで、やっとな縄ないが始まる。講師を務めるメイトの手許に集まる視線は真剣そのものだが、やってみると思いのほか難しい。「これ性格出るわ」の一声に、皆しげしげと自分の作品を見つめた。
「次は自分の足にあわせてわら草履を作りますよ」との呼びかけに張り切るも、出来上がった草履は足がはみ出しそうに細いものや、三角形のものと様々で、きれいな小判型には程遠い。「あんたの足、そんなんやっただんか」とからかわれながら、作り上げたという達成感にしばし浸った。

50周年記念館から 里山へ

里山自然学校の 新たな拠点



白峰から移築する50周年記念館。
新たな拠点として期待を集める

里山自然学校の7年間の活動では、金沢大学21世紀COEプロゲ

ラム「環日本海域の環境計測と長期・短期変動予測」の調査地として利用されたり、里山で催される行事への参加を通じて四季の移ろいを体感したり、生物調査による

絶滅危惧種の発見、棚田の復活などの里山環境の整備による生物種の回復と様々な成果をあげた。

その一方で課題点も見えてきた。「あれだけ広い里山を我々だけで整備していくのは限界があるよね」「今はその時々々の行事に出て楽しむという形の参加者が多い。それはそれで素晴らしいことだけど、準備段階にも参加するといったようにもっと踏み込んで欲しい」「里山自然学校は市民だとか国のレベルでは注目を浴びているけれども、学生や金沢大学全体を巻き込んでいくにはどうしたらいいのだろうか」という声がメイトからあがった。

確かに大学生の参加は非常に限られている。周りの学生に里山に行ったことがあるかと尋ねてみたところ、「里山ってどこ?」「入っていいの?」「道とかちゃんとあるの?」と逆に聞き返された。また里山自然学校の活動について知っている学生も少なかった。「里山との接点がないんだよね。例えば学食に里山で採れたものを使ったメニューがあるとか、自分たちに到達するものがあればつながりを実感できるけど」「ポスターだけでは参加しづらい。説明会とかがあれば」という意見が聞かれた。情報提供の必要性はメイトも強く感じている。「参加しない人に活動内容を伝えるために簡単なホームページを作って、各活動をしている人がそれぞれに更新していけば」。話は次第に50周年記念

館の利用を含めた活動へと移っていった。「春に50周年記念館が出来るでしょ。あそこに里山自然学校のセンター機能を負わせて、そこから情報発信をしていけばいいんじゃないか」「市民と研究者がタイアップして里山を保全していくための研究が必要。そのための人材育成をしていきたい」「子ども相手のしつかりしたカリキュラムを組んでやってみたい」「今の午前中だけの活動を、記念館でお昼を作って一日の活動にすることはできないか」。自然学校側からもメイトからも意見が次々と出てきた。

里山は対話の場である。人と人。人と自然。大学と地域。様々な形での出会いが生まれ、広がりをもっていく。「昔からの知恵や技、あるいは自然を知る楽しさを伝えていくこと。それが我々の務めではないだろうか」そんな想いに支えられた里山自然学校。50周年記念館という拠点ができそう

だ。
角間の里山自然学校
ホームページ HYPERLINK
<http://www.ed.kanazawa-u.ac.jp/~satoyama/index.html>

「角間の里山自然学校」と「里山メイト」は、
里山ゾーンの保全・管理・活用のために、様々な活動をしています

どなたでも里山メイトに登録できます!!

金沢大学角間キャンパスに広がる森は、昔から地域の人たちに親しまれた「里山」でした。そこにはアベマキ、コナラなどの落葉広葉樹、スギ林、モウソウチク林、ハンノキ林などがあり、多くの動植物が生息しています。「角間の里山自然学校」(1999年発足)は、この豊かな自然を学内の教育・研究フィールドとして利用するだけでなく、地域住民の学習活動、青少年の自然体験の場として開放しています。

定期活動日 毎月第2、第4土曜日(午前9時から)

集場所 金沢大学創立50周年記念館(仮称)

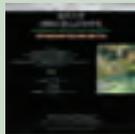
これからの活動 四季の自然観察会(植物、昆虫採集、ホタル、野鳥など)、棚田の復元、炭窯づくり、竹林整備、タケノコ掘り、竹炭づくり、遊歩道整備、雑木林管理、草だんごづくり、笹ずしづくり、里山クラフト、草木染め、植物調査、動物調査

里山メイト問い合わせ

角間の里山自然学校事務局

E-mail: satoyama@ed.kanazawa-u.ac.jp

<http://www.ed.kanazawa-u.ac.jp/~satoyama/>



金沢はこんな街 知る・味わう・体験する講座「金沢学」

美しく豊かな自然と、伝統に育まれた文化をもつ地、金沢。世界の情報がリアルタイムで入ってくる今日、自らの文化を知り、見直すことで多文化への理解、異文化コミュニケーションの第一歩としたい。金沢大学では、これまで主として留学生向けに開講してきた「金沢学」を発展させ、市民に開放する。

学生編集委員 水木 裕子

金沢を実感する 体験的教育プログラム

金沢大学が開講する「金沢学」は、講義によって学問的な背景を知り、体験を通して文化的理解を深める、参加型の体験的教育プログラムだ。金沢に点在する有形無形の文化的遺産や文化的価値を明らかにし、それらを用いて講義や体験が行われている。

「金沢学」開講3年目となる平成16年度は、夏コース、冬コースともに1泊2日の日程で、留学生20名、日本人学生10名が参加した。夏コースの舞台は能登。「能登の自然と農業」、「能登地域と東アジア地域の交流」といった講義のほか、「お熊甲祭」やのどじま水族館の見学など、多角的に能登の文化に触れた。冬コースでは、県立歴史博物館において「加賀の美術工芸」、サテライト・プラザでは「北大路魯山人」の講義を、また「和太鼓体験」や「加賀料理の実

習」をキゴ山ふれあいの里研修館で行った。

参加者のうちのおよそ半数が、「興味のある文化体験プログラム」であることを「金沢学」への参加理由としている。参加者の9割が内容に関して「とても満足」「満足したほう」とアンケートに答えたが、その理由としてあげているのは、体験によって金沢を肌で感じる事ができたこと、参加者同士の交流ができたことだ。共に行う様々な体験を通じて、交流しあえたことが満足できた最大の理由であろう。一方、日本語力が十分ではない留学生にとって、難しい漢字や専門用語、歴史に関する基礎知識を要する講義は、理解し難いものであったことも確かである。しかし、理解を深めるためには、体験だけの学習では不十分であり、講義との組み合わせや事前学習の工夫を考える事が課題となっている。



熱のこもった指導のもと、真剣なまなざしでばちをにぎる留学生。和のリズムを体感する



加賀の郷土料理・治部煮をつくる。体験を通して、参加者同士の交流は深まる

金沢学のこれから

○科目に「ひろがり」「深まり」を

文化と一口に言っても、金箔工芸や加賀友禅、茶道、能楽といった「かたち」があるもの、武家屋敷や茶屋街に代表される街並のよう全体をみたときに文化として存在するものなど様々だ。金沢の文化として守ってゆきたい、伝えてゆきたいと考えられるものを、「金沢学」に盛り込み、科目の拡大と深化を進めて行く。

○市民参加

「金沢学」は平成14年度の開講以来、和太鼓の技術指導や調理実習のサポート、文化活動を通じた交流面で市民ボランティア組織の協力を得ており、ボランティアの

方々とのつながりを深めていきたいと考える。また、いしかわシティカレッジやサテライト・プラザとの連携を視野に入れ、地域の人々が講座に積極的に参加できる環境を作るとともに、市民の方々と共に地域の文化を再発見する機会を提供してゆく方針だ。

○日本人学生の参加

これまで日本人学生の参加は少なかったが、来年度からは多数の参加を呼びかけたい。とりわけ留学を考える学生、「ふるさと教育」を実践する教員志望の学生の参加に期待をよせる。自分たちの文化を知り、大切にしてこそ他の文化に対する理解や尊重の念が生まれ、多文化共生を進めることにもつながると考える。

「発達・学習・記憶と障害の革新的脳科学の創成」 21世紀 COE プログラム始動 世界水準の 脳研究拠点に



文部科学省の採択する平成16年度「21世紀 COE プログラム」のひとつとして、金沢大学のフロンティア科学研究機構による研究課題が選ばれた。基礎研究から臨床、教育まで、脳科学における学内の各学問領域のプロフェッショナル12名の研究を結集した、まさに革新的な試み。今後5年間かけて研究が行われる金沢大学 COE プログラムの全貌が今明らかになる。話を聞けば聞くほど「へえ～」と言わずにはいられない。

学生編集委員 東海 佳奈子

遺伝子レベルでは ハエと人は似ている？

教室内で落ち着きなく動き回り勉強に集中できない——現代の子どもに見られる「注意欠陥多動性障害」。近年その原因として挙げられるようになったのは、脳の遺伝子レベルの障害である。

「これまでは個々の子どもの様子を見ながら、どう対処し教育していくかを親御さんと話し合うことに重点が置かれていました。しかし、脳の中にどういった障害があるのか、その原因を解明し、薬や新しい治療法を見つける基礎的な研究は、あまりされてこなかったんです」

発達障害や認知症（いわゆる痴呆）は脳の病気である。脳のどの部分の機能に異常があるのか、遺伝子にその原因を見つけることができれば、将来的には他の病気と同じように外科的内科的「治療」が可能になる。

そこで重要なポイントとなるのがハエの脳だというのだ。COEプログラム拠点リーダーであり、シヨウジョウバエの遺伝子構造を研究している医学系研究科東田陽博教授は、こう言う。

「ハエのもつ基本的な神経系の遺伝子構造は、ヒトと似ている部分が多いんです。シヨウジョウバエの遺伝子配列から、それに相当するヒトの遺伝子配列をほとんど推定することができます。ヒトの研究のために、ヒトの遺伝子を操

作するわけにはいきませんが、ハエの遺伝子を探ることで、ヒトの脳のしくみを解明することができます」

しかも、一般的な実験動物であるマウスの場合、その寿命は2年ほどであるが、シヨウジョウバエの寿命はさらに短く2週間。シヨウジョウバエを実験に用いれば、遺伝子操作によってどのような変化が起きるのか、1日で結果を出せる。このオドロキの研究が出发点となるわけだ。

ハエで神経系の形成・発達に必要な遺伝子を見つけることができれば、それを哺乳類であるマウスに応用し、遺伝子改変技術を用いて解析する。行動・記憶学習・発達という面でさらにヒトに近い研究を進め、最終的に実際の子どもへの発達障害や高齢者の認知症の治療といった現実的場面へと結びつける。そういったツールなプロセス全体を研究していくことが、今回のプログラムの目玉である。

文理の境を超えて 新たなパワーを生み出す

「例えば、1人分の広さの部屋に10人分のオモチャを入れたら取捨がつかなくなるでしょう。発達障害の人たちは、必ずしもオモチャを持っていないわけではなく、オモチャがありすぎるといってもかもしれない。年齢に適したものには残して、足りないものは足らしてあげて、快適に過ごせる環境を

21世紀COEプログラム

「大学の構造改革の方針」に基づき、平成14年度から文部科学省に新規事業として「研究拠点形成費補助金」が措置されたもの。

我が国の大学が、世界トップレベルの大学として教育及び研究活動を行っていくためには、第三者評価に基づく競争原理により競争的環境を一層醸成し、国公私を通じた大学間の競い合いがより活発に行われることが重要です。

我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、重点的な支援を行い、もって、国際競争力のある個性輝く大学づくりを推進することを目的としている。

COE研究 メンバー紹介

教育現場で生じ社会問題化している自閉症、アスペルガー症候群他動症、学習障害などの発達障害児にかかる脳機能障害に真正面から取り組み、その原因と脳の発育メカニズムを解明する課題に挑戦する。

原因を見つけるべく脳の仕組みを科学的に解明し、薬の開発などを



■東田 陽博 (ひがしだ はるひろ)

大学院医学系研究科
脳細胞遺伝子学講座 教授
1947年生まれ
1971年 岐阜大学医学部医学科卒業
1975年 名古屋大学医学研究科博士(博士後期)
課程修了
専門分野は、神経科学、神経化学

作ってあげる。そのためには、何が必要で何が不要なのか、原因を探ることから始めなければなりません」

このプログラムを推進させるために金沢大学が設立したフロンティア科学研究機構とは、これまでの文系・理系といった枠を超えて組織された研究者集団である。ハエの神経遺伝子学、発達・記憶学習の生理学、遺伝子改変動物作成技術、薬物作用の研究といった科学的分野と、アルツハイマー病の診断・治療などを手がける臨床神経内科の分野、そして重度心身障害児の研究や認知心理学といった人文社会科学分野での研究。それぞれが優れた実績を積み上げ、これまでも世界的に高い評価を得ている。

「個々の研究が高いレベルにある自負は十分にあります。それらが今回、有機的に、手を結ぶことによつて、もう一つの研究や新しい学問領域を生みだし、社会や地域に直接貢献できるものを創りあげていこうとしているのです。」

COEとしての研究期間は5年だが、さらに長いスパンで研究の輪を広げていくことも視野に入れている。

「仮に大学での研究を第1ステージとするなら、その成果を核にして地域との連携を進めていく

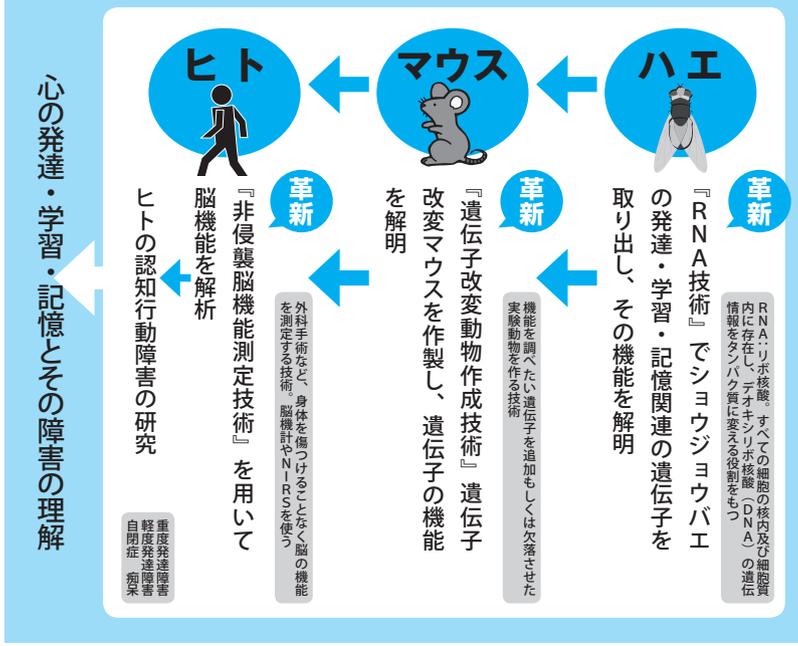
大学が担う リーダーシップの形

これは外から見てもすごいパワーになると思います」

かつては原因が一つだけだと思われていたアルツハイマーやパーキンソン病なども、現在では複数の原因が判明している。今後のCOEプログラムでの研究を通して、脳の障害の原因を少なくとも一つは解明しようという意気込みだ。

最先端の脳解析機器——脳にメスを入れることなくその機能をイメージ化して見ることが出来る脳磁計やNIRS(近赤外分光脳機能測定器)など——も導入し、時代の要請に応えた新たな研究に進めることになる。

『発達・学習・記憶と障害の革新的脳科学の創成』



のが第2ステージ。自治体と新しいセンターを作るとか、民間企業とタイアップするとか、いろいろな可能性があると思う」

事実、これまでの金沢大学の実績に加え、県内私立大学における研究も盛んであり、石川県が推進する健康・福祉政策も充実している。地域、県と市、他の大学も含めた連携をもっと強化していくことができれば、脳研究の世界的な拠点となりうるポテンシャルは十分にある。今回のプログラムの成果は、その実現に大きな力を添えることになるだろう。

さらに、COEとして選ばれた金沢大学には、もう一つの大切な役割がある。世界トップレベルの教育および研究活動を行うための拠点を作り、それによって世界をリードする創造的な人材を育てることだ。

「金沢大学がより魅力的な大学になれば、さらに多くの魅力的な人材が集まります。そうすれば金沢も石川県も、もっと魅力的なところになっていくでしょう。そのリーダーシップの一端を担うことができ、大学としての重要な意義だと思っています」



- 治療へ直接的に結びつける基礎的な研究と、実際の子どもの発達障害や高齢者の認知障害にどう対応していくのかという教育方法の研究を2本柱にして文理架橋型の研究を進めていく。
- 各メンバーの研究分野
- 東田陽博 医学系研究科教授
シヨウジョウバエの神経形成の重要遺伝子について研究
 - 狩野方伸 医学系研究科教授
発達記憶学習のメカニズムの研究
 - 平井宏和 学際科学実験センター 助教
発達記憶学習のメカニズムの研究
 - 浅野雅秀 学際科学実験センター 助教
遺伝子改変動物作成技術の研究
 - 山田清文 自然科学研究科教授
薬物中毒の研究
 - 小川 智 医学系研究科教授
神経細胞死の研究
 - 山田正仁 医学系研究科教授
アルツハイマー病の診断、治療
 - 片桐和雄 社会環境科学研究科教授
重症心身障害児の研究
 - 小島治幸 社会環境科学研究科 助教
認知心理学の研究
 - 大井 学 社会環境科学研究科教授
コトバの発達学習とコミュニケーション障害の研究
 - 小泉恵太 学際科学実験センター 講師
神経形成に関わるハエの遺伝子研究
 - 杉山登志郎 学際科学実験センター 客員教授
アスベルガー臨床にあたる研究

地域へ発信される学びの場

家庭での学習に始まり、学校での学習、さらに社会に出てからの学習…と、私達はあらゆる場所で「生涯学習」を続ける。生涯教育がユネスコで提唱されてから早40年。近年、特に社会に出てからの学習の重要性が見直されている。そこには、学歴より学習歴の間われる社会を築くという目標、また、社会の変化に対応する必要性といった背景がある。そこで大学では、公開講座やミニ講演等を通して地域の人々の生涯学習をサポートしている。

学生編集委員 安井裕奈、下里真悠子

公開講座

金沢大学では昭和40年代から生涯学習事業の一環として公開講座を行っている。その特徴は、「総合大学である特色を生かし、教養から専門まで、幅広い分野の講座を開講している」ことだ。そして、その内容には「より専門的で高度な知識を、わかりやすく講義をする」ことに気を配る。これには、毎回、受講者からアンケートをとり、その結果を次の企画にフィードバックしている。「もう少し踏み込んだ話の方がおもしろかったと思う」「もっと分かりやすい資料が必要」「難しそうだったが、具体例が身近で分かりやすかった」等々、いただいた意見を参考に「話し方」や「配付資料」を工夫するなど、質の向上に努めているのだ。

公開講座には、大学にとつての利点もある。研究成果の還元や大学の活動を理解していただける機

会になるという事だ。さらに、公開講座から得られる地域の声は、教育方法の改善につながるなど、教育研究活動の活性化にもつながる。

金沢大学では大学と地域を繋ぐ一端を担う「公開講座」の重要性を認識し、地域の方々が受講しやすい環境を整えている。大学が法人化され、公開講座の受講料が独自に設定できるようになった。そこで、16年度からは、これまでの約半額に受講料を設定し、経済的にもより受講しやすい環境となった。受講料は、最寄りの銀行で振

り込みができ、修了証の発行、角間キャンパスだけでなくサテライト・プラザでの開講など様々な便宜を図る。もちろん、石川県民大学校との連携も行っている。

地域の方々の生涯学習への関心が高まる中、大学はじめ、自治体等が主催する講座が多数開講されるようになり、地域のニーズに定める環境が整ってきた。その中でも、金沢大学「公開講座」の果たす役割は大きい。この「公開講座」を通して、大学を舞台に生涯学習に取り組んでみませんか。

ミニ講演（遠隔講座）

公開講座のほかに、「ミニ講演」を実施している。

「ミニ講演」の特徴は、その「身近さ」にある。毎月1回、土曜日の午後に開催し、公開講座のようにまとまった時間のとれない方には受講しやすい時間帯だ。開催場所は、金沢市の市街地にあるサテライト・プラザ。「郊外の角間キャンパスまでは遠くて行きにくい」という方には、足を運びやすい。

「でも、結局は、金沢近郊に住んでいないと受講しにくいのでは？」。この疑問に答えるのが、テレビ会議システムを利用した遠隔講座だ。これは、ミニ講演の声と映像をライブ配信するだけでなく、画面を通して受講者の質問も受け取ることができる。遠隔地にながらにして、金沢会場と同じ環境が得られるわけだ。この遠隔講座は、毎回、希望する市町村に配信している。



ミニ講演「心をふるわす感動の言葉を味わいましょう」



公開講座「暮らしと法」、暮らしに役立つ法的知識をわかりやすく説明した

ミニ講演が身近な講座であることは、時間や場所といった条件だけではない。本場の「身近さ」は、その「テーマ設定」にある。テーマの設定は、講演の数ヶ月前に決定され、その選択には市民の要望はもちろん、生活に密着しているもの、その時々話題性に富んでいるものをピックアップしている。16年度も、計12回開催し、中でも1月に開催した「がん休眠療法2005」がんと共存できる最新

平成17年度公開講座の実施予定

平成17年度開講予定の講座の中から一部を紹介します。

生活習慣病を克服しよう

6月～ 医師、看護師、栄養士の方々による病気ごとの症状や検査結果、また食事療法や運動療法による効果の分かりやすい解説。さらに、実際に尿糖や血糖、血圧、体脂肪率、体格指数、血中酸素飽和度等の測定を行います。

生命体と化学物質とのかかわり

5月～ 人間を含め、地球上には様々な生命体が存在します。これらの生命体はそれぞれ、様々な化学物質を介して環境と調和して必死に生きています。化学物質と生命体との関わりについて5つの視点から掘り下げていきます。

異文化理解のたのしみ

6月～ 異文化理解ないし異文化コミュニケーションのたのしみについて理解を深めることを目的として、異質な文化の中に、共感する要素が少なからず存在することを各講師の講義を通し、見出していきます。

もしもの時の法～こんな時どうする？

6月～ 自分や家族の生活を守るために必要な法の知識。また、裁判員に選ばれて法を適用する側に立った市民の義務を知る必要性。私達を取り巻く制度を知り、正しく利用するため、法的知識を知っていただく講座です。

白山麓白峰の民話と方言

7月 白山麓に位置する白峰、その白峰の方言は周りの方言と著しい違いを見せ、地続きでありながら「言語の島」と呼ばれるほどです。この講座では、方言で語られた民話を読み解き、白峰方言の特徴を見ます。

幼児教育の現場から考える現代の子育て

6月～ 日本では世界で最も子育てが下手になりつつある国だと言われています。引きこもり、いじめ、幼児虐待などの社会問題はどこに問題があるのでしょうか。これらを現代の子育て学の立場から考え、子育てに関わる技法を学びます。

薬局見学、体験ツアー

9月 薬局は単に薬を売る店ではありません。この講座では、2つの薬局と大学病院の薬剤部を見学し、患者さんの病気や状態を考えながら薬を調剤している薬剤師の姿を見ていただき、安全に薬を使うための知識を増やしていただきます。

ユーザ立場からのコンピュータ利用技術

8月～ Webサービスの仕組みからインターネット接続、ウイルスや不正アクセス防止の手法についてわかりやすく解説します。また、データベースの活用法と人工知能を用いた問題解決法について講義を行います。

お問い合わせ先

金沢大学大学教育開放センター

〒920-1192 金沢市角間町
TEL 076-264-5272、5273 FAX 076-234-4045
E-mail kaihou@ad.kanazawa-u.ac.jp
http://www.kanazawa-u.ac.jp

治療」では、定員30名を遙かに上回る約80名の方が受講した。「生涯学習への市民の要望の高さには驚かされます。」と大学教育開放センターの鈴木漠教授。さらに続けて「市民の関心の高いテーマを、その専門家が分かりやすく解説することで、この要望に応えていきたい」と言う。

17年度も4月23日開催の「うつ病ってどんな病気?」を皮切りに、毎月、開催していく予定だ。

大学の一端を身近にふれることが出来るこの「ミニ講演」。しかも、これほどの内容が、なんと「無料」なのだ。



和太鼓の打法と指導法入門

10月～ 和太鼓の歴史と地域的特性、運動面から見た効果、楽譜の利用と作曲の方法等について学び、本講座のためのオリジナル練習曲を中心にいろいろな種類の和太鼓に実際に触れながら実践的な演奏方法を学びます。

秋の風景スケッチ(水彩画)

11月 透明水彩絵の具は、鮮やかな発色と速乾性が特色で、大人から子どもまで幅広く手軽に楽しめる画材です。色づき始めた秋の紅葉風景をスケッチし、透明水彩絵の具を用いてその美しさや感動を表現する講座です。

経営・情報講座

12月 認知心理学の知見を導入した「行動ファイナンス」と呼ばれる研究領域が注目を高めています。本講座ではプリンストン大学のD・カーネマン教授の理論を読み解き欧米での実証研究を紹介します。



児童の個別指導。
その中でチューターの果たす役割は大きい

～新たにまなぶ「場」がここにはある～

現場とタッグで

未来の教員を養成

平成15年度より文部科学省の研究事業の一つとして始まった放課後学習チューター制度。放課後、チューター（大学生）は個別に児童に算数などを教える。授業中の疑問点・つまづいた点を解消するため、金沢大学生もチューターとして小、中学校で活動している。県内8校の小学校、中学校が研究協力校として指定されており、今回、材木町小学校で活動する放課後学習チューターを取材した。

学生編集委員 塩本 祥之、中西 晋康

教室内をぐるぐる 回るチューター

1 限目、算数。普段、材木町小学校の6年生児童は習熟度別に各教室に分かれ授業を行うという。今日は、いつもと違い、担任の東佐千雄先生の下、6年2組のクラス全員が一緒になって算数の課題に取り組み。児童は課題が一つ終われば、先生に出す。正解なら、次の課題に取りかかる。先生は課題ができた児童の添削に追われる。36人の児童が、ひっきりなしに先生の前に列を作る。教室は、にわかには活気づく。

習熟度によって進度が違う児童。積み重ねが大事な算数は、つまずくとそこから先には進めない。そんなとき活躍するのがチューターだ。「習熟度の違いは把握しているので、そういった子に重点的に目を配ります」と教育学部3年の西野里実さん。教室内をぐるぐるとは回り、あちらこちらで児童に課題のヒントを出す。「先生ちよつと、きて」とチューターを呼ぶ。「はい、先生」とチューターのもとに走り答案を見せにいく子。チューターに立ち止まる暇はないようだ。忙しそうなたチューターだが、「教えることが楽しいんです」と笑みをこぼす。

東先生も「やっぱり、個人個人に目が向けられないときはある。チューターは、習熟度別授業で、児童の進度を把握しているから助かっている」とその活躍に太鼓判



「先生」であり、「お姉さん」でもあるチューターは、休み時間でも大人気

**現場で求められる
柔軟な対応**

放課後学習チューター制度。本

を押す。「やさしいし、話しやすい」、「分からない所を聞きやすい」、「先生とは違って友達感覚で聞ける」と児童は言う。先生の補助的な役割のチューターは、自然に教室に駆けこんでいた。

材木町小学校には8人の金沢大学の学生が来て1回2時間の活動を週1、2回行っているという。6年2組には2人のチューターがついている。

先生との関係も良好のようだ。「先生方は、私たちにとても親切なんです。教材の選び方なども教えていただけます」と教育学部3年の西田有希さん。

教育現場を通して、先生とチューターが積極的に関わりあいを持ち、互いに理解を深めながら、新たな信頼関係を生み出しているのだろう。

来なら放課後に行うはず…。しかし、児童が放課後に課題を行うことを強制できない。来る子もいれば来ない子もいるのが実情という。「もっと子どもと関わりたい」とチューターが授業に参加することなどをお願いしたという。

いまでは、「授業で教えた内容と放課後に行う習熟度別クラスの内容が上手くリンクするように気を遣っている」と先生も話す。

各学校によってその取り組み方には違いがあり、その幅も多様化しているようだ。材木町小学校では、授業の補助と放課後に行う学習指導の2本立てになっている。他の学校へ行くチューターは、児童に合わせた算数のプリントも作っているという。

材木町小学校のチューターは、授業に参加することでいくつかの発見があったという。「実際の授業の雰囲気分かる」「先生の立場で冷静に児童を見ることができるとチューターは口を揃える。授業を見て学び、教室の雰囲気や先生の教え方を肌で感じとっているようだ。

「若い力が入り授業が活性化する。本の読み聞かせなどもチューターが工夫してやってくれる」と先生。チューターが自ら考え、授業に参加することによって、教育現場にも新たな化学反応があるようだ。

しかし、いいことばかりではない、という。先生は、「チューターの活動は、大学で単位認定がされていないため、時間の確保が難し

い。学生も平日は大学で勉強がある。来てほしいときに都合がつかなかったり…」と顔をしかめ、「お互いに必要としているのにも上手く時間がかみ合わないなど、とても苦しかった」と本音を漏らした。大学側にも単位認定などの配慮が必要なようだ。

**可能性を切り拓いた
2年間の学びと実り**

平成16年度は、金沢大学の学生約40名が、チューターとして登録し、各学校に派遣されている。学生の所属は、大学院教育学研究科、教育学部、経済学部、理学部と多岐にわたる。どの学生にも門戸が開かれている。経済学部の学生は「この制度がなかったら、学校に行って児童と向き合うチャンスはなかった。あつてよかった」と話す。

教育学部以外の学生にとって、実際に小学校、中学校に行き、現場と関わる機会はありませんの現状。そのニーズにも十分応える「場」がここにはある。学生は、



「昨日のドラマ見た？」児童とのお喋りも貴重な体験だ

KEYWORD

**放課後学習
チューター制度**

金沢大学では、文部科学省の「学力向上アクションプラン」の一つとして石川県教育委員会が実施する「放課後学習チューターの配置等に係る調査研究事業（実施期間：平成15・16年度）」の指定を受けた石川県内小、中学校8校に、学内から公募した教員志望の学生1年生から4年生など、約40名を派遣している。週1、2回、数名のグループで訪問する「放課後学習チューター（大学生）」

は、教員志望の学生が小、中学校に出向き、放課後などに児童生徒の勉強の分からないことの質問への対応など、児童生徒へのきめの細かい指導を一層充実させ、学習上のつまづきを解消したり、学習への意欲を育てたりすることで、学力向上に役立てようとするもの。児童生徒と年齢の近い大学生をチューターにすることによって、子どもたちが話したり、相談したりしやすい環境をつくる。同時に、学生が学校で子どもたちと直接接する中で、学校や子どもたちの姿を知り、教員に必要な能力の向上につなげることも目的の一つとしている。

子どもたちからの通知表

チューターってどう思う？

- やさしい (男子)
- 聞きやすい (女子)
- 教えてくれるからいたほうがいい (女子)
- しゃべりやすい (女子)
- 僕の辞典を勝手に使ったりする (男子)
- わからない所がまあわかる (男子)
- 先生の順番がつかまっているときに聞きやすい (男子)
- 先生とは違って話しやすい (女子)
- 友達感覚 (女子)
- よくしゃべるからおもしろい (女子)

長期的な関係を各学校、先生、児童・生徒と共に作ることでできるようだ。その可能性はどんどん広がる。大学と各学校が手を携え、共に学んでいく中で、徐々に理想の形に近づく。そのきつかけと

なった放課後学習チューター制度。16年度で調査研究としてのこの制度は、いったん幕を閉じる。2年間で培われた成果は今後、教育現場と大学での人材育成にどう生かされていくのだろうか。

社会貢献室の取り組み

地域からの要望を受ける「総合窓口」、大学の知的資源と地域のニーズを繋げる「橋渡し役」。

この2つの機能を担った社会貢献室の活動は4年目を迎えようとしている。これまでの活動の成果と今後の課題を検討した。

確かな前進 個人から組織の連携へ

大学はこれまでも教育研究成果を還元して社会に貢献をしてきた。しかし、もっと身近な地域との連携や交流においてはどうか？ 確かに、地域との連携は様々なところで行われていたが、それは教員と地域との個人レベルでの繋がりに依るものが多かった。これも、十分な地域貢献ではあるが、そこには少なからず問題点があげられる。「教員との繋がりを持たない自治体や住民は取り残されていく」「事業の発展性が少ない」などだ。

これまで金沢大学の社会貢献活動を推進する中で得られた大きな成果の中には、大学と地域が組織的に連携し、活動するようになったという事だ。大学が組織的に社会貢献を推進することで、地域にその姿勢をアピールすることが出来た。その結果、自治体や住民に「大学に聞いてみよう」「大学と協働したい」との意識が少なからず芽生えてきたように思う。ま

た、組織的に事業を行うことは、学内においても文系、理系の枠を超えた横の連携が強化されることにも繋がっている。

ざっくばらんな地域との対話 「タウン・ミーティング」

地域住民や自治体との連携へのきっかけとして一役買っているのは、「タウン・ミーティング」だ。前号でもこの取組は紹介したが、今年は石川県能登半島の先端にある珠洲市で開催した。

平日の夜にもかかわらず、予定した定員を大きく超える約100名の参加者が訪れた。原発の誘致案が無くなり、新たなまちづくりを模索しているからだろう、大学に対する期待は大きい。

今回は、大学が具体的な提案を持って開催にのぞんだ。それは、将来的にサテライトを珠洲に開設することを視野に入れた提案だ。社会貢献室長でもある橋本理事が「公開講座の珠洲市での開催」や「共同研究に関する相談窓口の設置」などを含んだ、7つの具体

的な提案をした。(別刷「金沢大学タウン・ミーティング in 珠洲市報告書」)参加者からも様々な提案や要望が出され、活発な意見交換が行われた。

2時間30分のざっくばらんな対話であったが、これからの期待は大きい。それは、互いを理解し合うことができ、それが連携の第一歩となるからだ。

大学の社会貢献は、難しい言葉で言うと「知的資源の還元」である。これが「地域の活力」と結びつくことこそ、大学としてあるべき社会貢献の形だ。この形が、タウン・ミーティングをきっかけに生れはじめていく。

これからの課題 学生の社会貢献活動への参加

社会貢献に対する大学の姿勢が地域に浸透するにつれ、地域からの様々な要望が寄せられるようになった。その要望の中でも特に多いのが、学生への期待である。

金沢城内キャンパスから角間に移転して以来、金沢の中心地から学生が消え、活気が無くなったという話は良く聞く。

「地域を調査研究のフィールドとして使ってほしい」との声も多い。これは、地域住民にとって自分の住む地域の再発見につながるからだ。「若者が来てくれるだけで、地域が活性化するんです」とは過疎化や高齢化に悩む地域からの声だ。

現在、地域をフィールドとして調査研究する学生はいるが、それはごく一部だろう。地域には、その地域特有の課題があるものだが、それを研究テーマとして取り上げ、成果を地域に還元する。それは、地域にとつてのメリットだけでなく、研究課題をいただける大学側のメリットでもあることを考えると、これらの声に応えていかなければならない。

「学生と交流を持ちたい」というのは、金沢大学の門前街、杜の里地区からの声だ。「ゴミ出しのマナー、騒音など悪い面ばかりが目につく」。12月に開催した「地域交流フォーラム(テーマ…大学門前街をつくらう)」で聞かれた地域の率直な意見である。

学生は、大学で勉強に励むだけ意識するのではなく、地域の住

民として社会生活をしているという意識を持つことが必要だが、そのためには、「地域住民と学生の交流」が鍵になる。

16年度、社会貢献室では、金沢大学生を対象に「インターンシップ」を実施した。これは、学生が大学の業務を体験すると同時に、社会貢献事業に直接携わることによって、地域との交流の機会を与えることが出来るからだ。「学生編集委員」の活動も同様のことが言えるだろう。人材育成と同時に学生と地域との交流の活性化を目的としたこのような事業はさらに推進していくつもりだ。その他にも中高生の職場体験の受け入れや子ども参観日の開催などもした。増え続ける地域からの要望に応える社会貢献室への期待は大きい。



3月中旬の今日、角間は暖かい陽射しにあふれ、雪もすっかり消えました。白峰から移築、再生中の古民家が燦然として輝きを増しています。法人化2年目を迎える金沢大学社会貢献室は、この美しい拠点を活用して、地域との連携を一層強めようと考えています。様々な企画を持ってデビューしますので、何とぞよろしく。
社会貢献室長 橋本哲哉

社会貢献室員

- | | |
|--------|-------------------|
| 橋本 哲哉 | 社会貢献室長・理事・副学長 |
| 鈴木 太郎 | 社会貢献室主任・情報部情報企画課長 |
| 上口 大介 | 情報部情報企画課課長補佐 |
| 大久保 進 | 情報部情報企画課社会貢献係長 |
| 山本 秀樹 | 地域貢献コーディネーター |
| 掛野 由香 | 初等中等教育支援コーディネーター |
| 中村 晃規 | 研究員 |
| 笠木 哲也 | 研究員 |
| 中村 浩二 | 自然計測応用研究センター 教授 |
| 鈴木 漢 | 大学教育開放センター 教授 |
| 黒川 義文 | 総務部総務課長 |
| 木之下 英二 | 学生部教務課長 |

編集委員紹介

学部も学年も、参加した動機も様々な学生10人が集まった。手探りでスタートした編集作業も終え、ついに刊行を迎えた。これまでの活動をふり返り、伝えたい、学生編集委員からのメッセージ。本音が出ています!!

社会貢献室から

「金沢大学ってこんな事もしていたんだ」

これが、学生編集委員が編集作業を通して感じた率直な意見だろう。この活動で、学生として自分の専門を学ぶだけの視点から、一歩踏み込んで大学全体を見る機会を得た。金沢大学の良さ、地域の良さ、その中

にある共生の関係を体感してくれたと思う。

「大学の社会貢献とは何か?」の議論からスタートした今回の活動は、地域に対しての情報発信だけを目的としていたのではない。学生に対して、自分の通う金沢大学の真の姿に触れ、理解してもらう事でもあった。短い期間ではあったが、この活

動を通して学生が成長していく姿が手に取るように見えた。教員と学生、地域と学生、学生と学生。取材を通してさまざまな交流が生れたことは素直にうれしい。そして、形として残ったこの情報誌。この評価については、読者に任せることになる。評価がどうであらうと、新たなことにチャレンジし、形を残したことの意義は大きい。こ

の経験は、学生にとっても、我々職員にとっても様々な形で生かされていくだろう。

最後に、これまでとは違った視点から金沢大学を紹介するこのよ

うな情報誌は、職員の手によってだけでは絶対に出来なかった。この企画に参加してくれた学生編集委員には、心から感謝したい。



神谷 卓史 工学部電気電子システム工学科 1年

「何かを学ぶためには、自分で体験する以上にはいい方法はない。」 たまたま書店で立ち読みした本にインシュタインの名言として書かれていた言葉です。今回の編集を通して予想以上の収穫を得ました。学生に編集をある程度任せてくれた山本さんの勇氣に感謝します。そして僕達自身が社会貢献の種として自分の花を咲かせたいと思います。



中西 晋康 法学部法学科 4年

いい兄貴・山本さん。いいお姉さん・岸本さん。いい父親・上口さん。よき姉御・掛野さん。目標に向かって徐々にまとまってきた編集委員の仲間。編集委員や取材で出会えた人々、そのすべてに感謝! 「出会えたことが奇跡」 もっとやりたい! でもうあがいてもう卒業……。この熱い思い、あなたに託した。



縄野 朋子 文学部文学科 3年

とりあえず讀みだけ…と思っておそるおそる出たガイドンスだったのに、結局最後まで続けてしまった広報誌ゼミ。編集の仕事は軽い気持ちでは務まらないんだということが実感できました。大変な部分も相当あったけど、その分学ぶこと・考えることもあり、すごくやりがいを感じました。やめないうえよかった!



肴倉 玉実 文学部人間学科 3年

普段は同じ大学にいたら会うことなかった人々、この企画を通して知り合うことができたこと、それが一番楽しく感じられました。大学には多くの資源があるけれども、自分からアクセスしていかない限りそういったものを知る機会はない。行動を起こすことの大切さをいまさらのように実感しました。



館 謙太郎 経済学部経済学科 2年

今回はチャレンジをさせてもらう機会をいただいたと思う。自分のチャレンジはもちろん、今回だけで終わることなく、また手作りの作品を作りたいです。



塩本 祥之 経済学部経済学科 3年

自分達の手で一つのものを創り上げられたという事が何よりも嬉しい。初めは自分に出来るのだろうかと不安で、取材した方々や他の編集委員の様々な思いや考えを一つにまとめるのは大変だったが、苦労した分だけ学ぶ事も多かったし、出来た時の喜びも大きかった。今回編集委員として関わった事は、本当に誇りに思う。



安井 裕奈 文学部文学科 1年

今回学生編集委員として企画から記事作成まで全て携われ、また雑誌作りのノウハウを教えていただけ、大変自分の糧になりました。何より、それぞれ違う理由でこの仕事に携わろうと考えて集まった他の編集委員の方々とお会いし、濃密な時間が過ごせ、とても楽しかったです。



東海 佳奈子 教育学部人間環境課程 2年

金大って何??そこから、この「地域とともに」が始まった。金沢大学が地域に世界に向けて、どんな研究や活動を発信しているのかわかりかけにけり、視野が広がったと思う。今回の編集を通して、私に新しい刺激を与えてくれたみんなに感謝したい。これからも人が目標に向かって歩みだす一歩に出会えたいいな。



下里 真悠子 文学部人間学科 1年

冊子作りに興味を持ち学生編集委員になったのですが、作業を進めると思わぬ困難がありました。記事作成でのインタビューは初めての経験だったため至らない点もあり、苦労しました。しかし普通に学生生活を送っていたらば会う機会が無かつたらうらやま、興味深い話をすることが出来、実りある時間だったと思います。



水木 裕子 文学部文学科 2年

編集委員に応募しなければ、何も知らずに、知らないことに気付くことすらなく学生生活を送っていたに違いなし。大学を外から見つめて、「自分の知らなかった大学」に出会った。違った角度から見た金大は、縁でかで学生が通うだけの場所ではない。最先端の研究がなされ、学生のパワーがあふれるところであった。



平成 17 年 3 月 発行

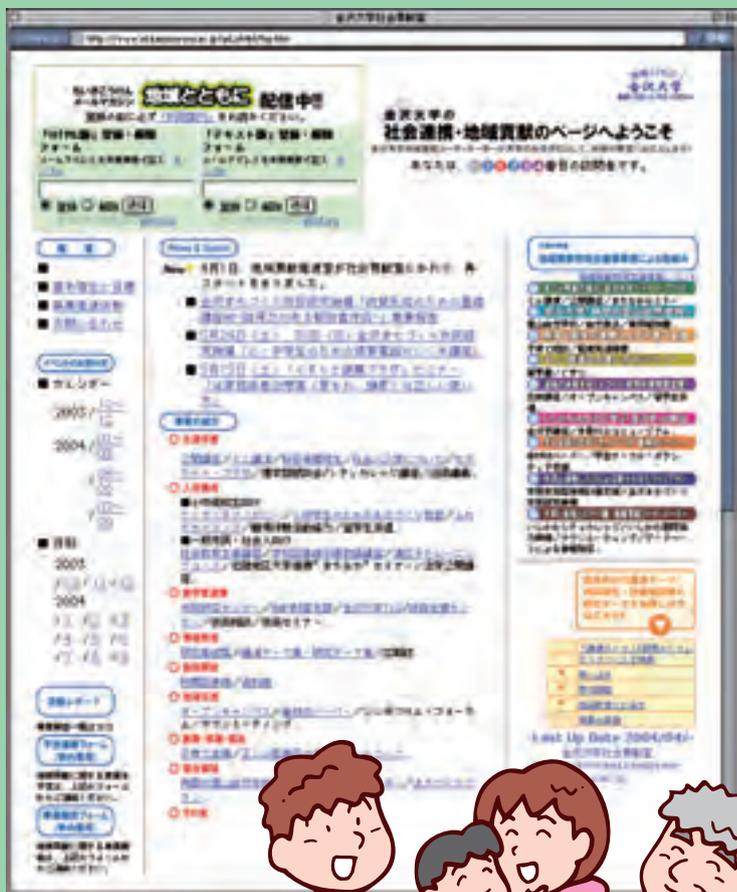
企画・編集・発行
金沢大学社会貢献室

編集協力 株式会社都市環境
マネジメント研究所

印刷 能登印刷株式会社

大学と皆さんを結ぶ 社会貢献室ホームページ

http://www.ad.kanazawa-u.ac.jp/ad_chiiki/index.htm



社会貢献情報が満載!

■ イベントのお知らせ

金沢大学のイベントに参加したい。
皆さんの知的欲求を満たす
イベントの予定が一目でわかる!!

■ 活動レポート

過去のイベントの様子を知りたい。
イベントに参加できなくても、
その様子わかる!!

■ 事業の紹介

金沢大学の社会貢献について
詳しく知りたい。
生涯学習、人材養成、地域交流など
活動の紹介はココからリンク!!



地域のニーズに応える「大学の総合窓口」
大学の知と地域のニーズを繋ぐ「コーディネーター」
大学の社会貢献に関する「情報発信拠点」

金沢大学社会貢献室

〒920-1192

金沢市角間町(金沢大学附属図書館内)

TEL 076-264-5290

FAX 076-234-4052

E-mail: chiiki@ad.kanazawa-u.ac.jp



学びと情報の発信拠点

金沢大学サテライト・プラザ

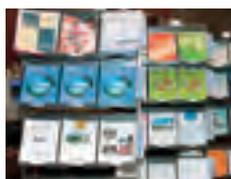
平成13年4月、市街地の金沢市西町教育研修館に「金沢大学サテライト・プラザ」を開設しました。

入学相談、公開講座・研究会やミニ講演会の開催、大学情報の発信などのほか、
金沢大学の「サテライト・キャンパス」として授業やゼミでも広く活用されています。

■金沢大学から情報発信

各種印刷物、ビデオ、CD-ROM、ホームページを自由に
ご覧いただけます。

■地域の大学等の情報を一堂に



「大学インフォメーション
センター」では、金沢大
学だけでなく、金沢市と
その周辺の各大学・短
大などの資料やホームペ
ージもご覧いただけます。

■金沢大学へのお問い合わせ、ご相談

入学・学生生活・卒業後の進路、社会人入学、科目等
履修生などについても、ご質問やご相談に応じます（内
容によっては、後日回答させていただく場合もあります）。

■金沢大学の 「公開講座」「ミニ講演会」「語る会」



大学の「知」をみなさまに提供します。詳細は金沢大学
ホームページ(URL:<http://www.kanazawa-u.ac.jp/j/>)
に掲載しています。

■金沢大学とみなさまを結ぶ各種催し

講習会、スポーツ教室、父母・祖父母教室、寄席、大学
生と中・高校生の交流会など、地域と大学を結ぶ様々な
催しを開いています。



〒920-0913
金沢市西町3番丁16番地
TEL076-232-5343 FAX076-232-5383

E-mail : satellite@spacelan.ne.jp
U R L : <http://www.kanazawa-u.ac.jp/j/>

■開館時間

平 日：午前11時～午後7時
土・日・祝日：午前10時～午後6時
休 館 日：毎週火曜日、年末年始

